

第2回宮城県美術館リニューアル基本構想策定に係る懇話会 会議録

○ 日 時 平成27年7月22日(水) 午後2時～午後4時20分

○ 場 所 宮城県美術館 佐藤忠良記念館会議室

○ 出席者

(委員) 佐々木吉晴座長 大場尚文副座長 小野田泰明委員 中村政人委員

高山 登委員 竹内美恵子委員 吉川 由美委員

(欠席委員 1名) 泉 武夫委員

(宮城県教育委員会・宮城県美術館)

鹿野田副参事兼課長補佐 大森管理調整班長 小野寺社会教育支援班長

上原社会教育支援班課長補佐

有川幾夫館長 米倉 誠副館長 三上満良副館長 和田浩一学芸部長

西塚 弘教育普及部長 高橋伸昭総務管理班主幹

1 開 会

(進行：鹿野田副参事兼課長補佐)

只今から第2回「宮城県美術館リニューアル基本構想策定に係る懇話会」を開会いたします。

なお、情報公開条例19条によりまして、県の附属機関の会議につきましては、原則公開となっております。本懇話会につきましては、公開により審議を進めさせていただきます。

なお、泉委員から欠席の連絡が入っています。また、小野田委員と中村委員は遅れての参加との連絡が入っております。

中村委員につきましては、初めての出席となりますので、到着次第、自己紹介をしていただく予定です。

では、さっそく議事に入ります。以後の進行につきましては、座長をお願いいたします。

2 会議録署名委員の指名

(佐々木座長)

みなさんこんにちは。本日の会議の議事録署名委員2名を指名させていただきます。2ページの名簿順に高山委員と竹内委員をお願いいたします。

議事に入ります前に、傍聴人の取り扱いについて御説明申し上げます。本会議の傍聴につきましては「審議会等の公開に関する事務取扱要綱」が定められておりますが、本日の傍聴希望者について報告願います。

(事務局：小野寺)

本日、傍聴を希望している方がいらっしゃいますので、議場への入室を許可してよろしいでしょうか。

(佐々木座長)

わかりました。入室を許可いたします。

(傍聴者 3 名入室)

(佐々木座長)

なお、「審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱」第 8 条により、公開した会議の資料及び発言者を明記した会議録については、県政情報センターにおいて 3 年間県民の方々の閲覧に供することになっておりますので御了解願います。

それでは、議事に入ります。

3 議 事

(佐々木座長)

はじめに (1) の報告です。第 1 回懇話会について事務局から報告をお願いします。

(事務局：小野寺)

資料 1 について説明。(美術館の現状と施設見学の概要、懇話会の設置目的・ミッションの確認)

(佐々木座長)

前回会議のコンパクトなまとめと改めて基本的な考え方等について報告いただきました。この件に関して質問はございませんか。また、付け足しなどございませんか。

では、(2) の説明に入ります。今後の美術館の在り方あるいは方向性について今日的な役割や機能から御意見をいただく場となっております。このあと美術館の現状と課題について説明をもらいますが、付け加える点はないか、スリム化する点はないのか、新たな方向付けはないのか、などについて発言をお願いします。では、今の施設・設備の現状について事務局より説明をお願いします。

(美術館：米倉副館長)

資料 2 について説明

(佐々木座長)

ありがとうございました。施設設備について喫緊の課題については 1 2 項目あるということでした。主に雨漏り、水漏れなど劣化老朽化によるものですが、30 有余年にもなれば当然出てくるものです。それに基づく説明でした。特に展示室、収蔵については後ほど個別の検討に出てまいりますので、まずは、総合的なことについて施設設備に関する今の御説明に対する御意見ををお願いします。

(高山委員)

日常的な雨漏り等については、美術館や県が当然対応していくもので、我々がそれに YES や NO を言えるものではない。これからの未来に向かって提案してくれということならば、リニ

ューアルの話し合いもできる。今後予算化できるのかどうか分かりませんが、他県から比べて宮城県は芸術文化に関しては低予算でやっているの、その基本から立て直さなくてはならないということで、雨漏り等について我々がどうするというものではない。

(大場委員)

私もその通りだと思います。最初に何についてどう話せば良いのかということになるのですが、地域社会が美術館に何を求めているのか。美術館が何ができるのかと言う点については意見が出せると思います。今御説明いただいたことについては、内部でできることではないかと思えます。また、施設設備については、いずれ出てくるのではないかと思えますが。

(高山委員)

県として本質的に困っていることは何か。来館するお客さんからの要望等で困っているとかを踏まえて、我々は日常的に調査しているわけではないので、県はそれらをどうやって集約して我々の前に出すのかがしっかりとやるべきことであって、出していただいたものに我々がそうですかと確認したり、それに対して別に提案していくという順番があると思う。それがないと時間が無駄になる。

(佐々木座長)

県ではソフト面での当面の課題等について、事前に用意やまとめてあるのでしょうか。そこまではないということでもよろしいでしょうか。

(吉川委員)

今の説明の12番に開館当時には想定していなかった「多目的利用者への対応」についてあったが、具体的にどういうことなのでしょう。

(美術館：米倉副館長)

開館した当時、想定していなかったのは、外部業者などお客でも美術館関係者でもない人や物販の人達の施設内の待機場所です。

(吉川委員)

例えば企画展のパンフレットを販売する人などの待機場所がないということですね。

(美術館：米倉副館長)

特別展開会式に協力をお願いしているボランティア等の活動場所もない状況である。

(佐々木座長)

ここでは、ソフト的な課題ではなく、控え室等ハード部分が足りないということですね。基本的には、施設・設備の課題については、この懇話会で議論するということではなく、議

論する前に、現在施設がどうなっているのかを把握した上で次のステップに進んでいくという説明と理解してよろしいでしょうか。それでは、それらを踏まえた上で、いよいよ具体的な協議に入ります。

中村委員が到着しましたので、自己紹介をお願いします。

(中村委員)

中村政人です。東京芸大で絵画科の先生をしています。

現在、5年ほど前から千代田区の閉校になった学校を活用して、「アーチ3330」という民間の会社を運営しています。そちら側の立場で声がかかったと思っています。秋田県出身です。宜しくお願いします。

(佐々木座長)

よろしくおねがいします。では、美術館の現状を踏まえた上で、イの基本方針について説明をお願いします。

(美術館：米倉副館長)

資料3について説明

(佐々木座長)

運営基本方針について、御意見は後ほどいただくとして、まず質問はございませんか。

(高山委員)

P8に関して、解釈は時代と共に変わったと思うが、当初の「総合美術センター」の名称の意味の捉え方について説明をおねがしたい。

(美術館：有川館長)

この「総合美術センター」については、当時設置に当たって、1980年代に日本各地に美術館ができたときに、多くの美術館が掲げたもので、美術というものの領域が広がり、映像や音楽、パフォーマンスなどとの関連の中で美術の概念を考えていくという課題に対応するものでありました。それを今日に当てはめてみた場合、2つの観点が出てきます。1つは、美術という枠組みが大きく変わってきていること。もう一つは、当時は、経済的な裏付けがあった上での提言であったということです。

現在は当時よりも美術の概念が広がり、むしろ拡散している状況にあると思います。当初、美術の概念の拡大を美術館がカバーできるという前提での提言でした。これは宮城県美術館のみならず、当時各地にできた美術館において共通していたことです。そのとき念頭にあったのは、できるかどうかはともかくとして、ポンピドゥセンターという将来像が当時のビジョンとして影響を与えていたと思います。現在に立ち返って考えてみると、美術の概念が当時の想定をこえている状況にある。その点で美術館がカバーしていくのが良いのか、美術館として様々

な文化の中で、美術館ができることを集約したり、見据えて、関連する他の領域との接点を求めていくことが良いのか、美術館をスリム化していくことも考えていく時代になったのかなと思います。ただこのことは、当時の基本構想から始まったことですので、今我々が勝手にやめます、違う方向にいきますといえるものではない。その点も懇話会で議論していただければと思います。

(高山委員)

当時とは状況が変わって、概念の拡大や、結節点という意味において、今の現状で、展覧会や来客に対して、現実的に美術館では応えきれない問題が起きているとか、こんな事をしたいができないといった設備面での問題などどの程度あるのか、まとまっているのであれば見たいのですが。

(美術館：有川館長)

具体的にそれを項目としてまとめてはいない。美術の概念の拡大という点では、挙げた項目の1～6までは古くなったと言うことにすぎないのですが、それを元の老朽化する前に戻せば良いのか、新たな視点を取り入れていけば良いのかと言うことについては、我々も個別に事業を精査していないので何とも言えません。例えば映像を例にとっても、以前はプロジェクターがあれば十分であったが、今はプロジェクターよりもネットワークの問題になっています。そこまで美術館が対応していくべきかどうかということについては課題としてあります。その点なども意見をいただけるとよいと思います。

また、項目12にも関連しますが、当初は美術館は運営するものと利用するものがあるという前提でした。前川建築に関して言えば、運営と利用の建築導線が混乱がないように合理的設計になっているが、例えばボランティアのように美術館運営に携わるパートナーのような事業者等が合理的に建物の中に吸収できるような構造には成っていないところがある。

(高山委員)

概念の拡大も含め、この項目の中で、視点が入っていないのは、障害者なり一般的な社会的弱者に対する対応ではないか。幅広い対応型のアートとは何かという見方。できた作品を持ってくるのではなく、アートとは何かを問いかける時代になってきた。その点で、美術館としての構えはどうか。当初は、良い作品を集めて、みんなに開示するというところに主眼が置かれていたと思うが、いろんな人によって創られていく美術館という視点についてはどうか。アートを作り上げていく考え方などについてはどうか。開館当時はなかった考え方について、これから創られる美術館とは何かなど、現在 美術館の中にジレンマがあるのか、もともとある視点を維持しながら進めていきたいのか、今後の美術館の在り方について、美術館や県としてはどう考えているのか。

(美術館：有川館長)

建設当初、前川事務所との話し合いでは、館内に段差は創らないとしてきた。展示室の中で

一段下がるというようなものは避け、エレベーターで全てを移動できるものとしてきた。今のバリアフリーの入口的な部分についてはクリアしている。30年間で改修を必要としたのは1カ所のみ。県民ギャラリーの導線について改善をした。

現状では、駐車からのアクセスという点では問題がある。本館でも不便。美術館の西側に臨時の駐車場があるが、開館当時の想定よりも、展覧会規模が大きくなり10万人規模は想定していなかったが、今は大型展が多くなってきたのでその対応が求められている。

また、美術鑑賞全般に関わるバリアフリーの視点について、例えば車いすなどの利用者向けの展示の高さや大人数の中での鑑賞方法などを考慮して、同じ条件のなかで鑑賞できる環境作りというレベルにはまだ達していない。

(佐々木座長)

他に、違う観点から何かありますか。

(中村委員)

何を美術館のリノベーションの目的としているのか、何を前提としているのかがよく見えないう。日本中の美術館がハード面、プログラム面について同じような問題を抱えていると思いますが、アートと言うもの自体が美術館ができた後に、日本の社会にどういう結果をもたらしたのかという議論がベースになる。その中で宮城県は何をしていくのか。当時のポンピドゥセンターという考え方があったというのは、すごく大事なことで、ワークショップなど日本において先駆けて取り組み、先駆的な試みであった。全体的な美術館としての在り方を議論し、そこから各論に入った方が流れとしては議論の骨格が見えてくると思います。

例えば鎌倉県立美術館の時には、建物が壊される、そもそも美術館がなくなるというときに始めて周囲が騒ぎ出しました。当たり前存在したものがなくなるということの意味するもの。情報を蓄積してきた場所に建物がなくなるということは、文化を育むものやそれまでの歴史や関わってきた人がなくなるという問題になる。

また、日本中で美術館の老朽化とともにコレクションの問題も出てくる。今の宮城県美術館の収蔵コレクションで世界の美術館と戦う意思があるのか、美術館のコレクションで人を呼んで、うちの作品を見てくれと国際的な視点を持つのか、他の特徴で宮城発の文化を外に出していくのか、ここでは「国際的・・・」と書いてあるので、国際的に行くのだとしたときに、どうするのかということ。

さらに、2020年の東京オリンピックに向けた社会情勢の中で、文化プログラムは4年間続くので2017年から始まります。その日本の文化支援を形成していく流れの中ですごくジャンプアップできる、今までできなかった事への予算付けも含めて、関わりのなかった人もかわり合えるステージが来る。その中でこのリノベーションの話を進めると言うことは、大変タイミングの良いことであり、何かお役に立てるのであればと思っています。この会議で美術館のあるべき次の姿のビジョンを打ち出すことができるチャンスであり、日本中で苦しんでいる公立美術館の人たちの思いも組み立てる方向に成るのではないかと思います。どうでしょうか。

(高山委員)

我々のようにここに長く住んでいると半分あきらめのような部分もある。開館当時はワークショップや活動が活発だったし、県民ギャラリーや創作室の利用者も多く、美術館が生き生きとしていた。徐々に予算の削減等ですぼんできたりすると、自然とこなすことに精一杯で、何となく中庭なども元気なく、人が生きていない、人が使ってなんぼだが人が来ていない状況になっている。おのずと周りは結果的に人が何人はいったとかばかりが問題になってしまっている。

美術館の中には、生き生きとした空気が大切になるので、生き生きとした空間を取り戻すために、本来あるべき姿のものを取り戻し、さらに当時考えていたことよりもより豊かにする発想の中で議論を深めると具体的なものが出てくるという流れにしないと意味がない。目先の問題が出てくるようでは、残念。

美術館の在り方そのもの、当時の目的と現代の在り方が世界や日本で議論されている中で、予算面から地方の公立美術館が厳しい中で、どんな問題を抱え、それをどう打破し、それに市民がどう巻き込まれていくのか、我々の中で勉強しながらここを世界一の美術館にするような発想がないとだめなのではないか。

(吉川委員)

美術館が予算のない中で頑張ってきた歴史が分かるのであきらめがある。現在、宮城県文化芸術振興会議の委員として、宮城の文化芸術振興ビジョンの見直しをしている。5月に出た芸術文化の振興に関わる政府答申の中に、東北の復興とか地域文化を観光など地域産業に絡めて国を別な方向へ持っていこうとする流れがある中で、今絶好のチャンスである。震災のことも有り、われわれ地域の人間も改めて地元どんな文化があるのか見つめ直している。開館当時はカンディンスキーをもって国際的といっていたが、今は国際的といっても、震災によって世界の人と宮城県が直接つながっているいろいろな活動ができるようになっている。国際的に開かれ方の可能性は広がり変わってきている。また、いろんな可能性がオリンピックに向けても出てきている中で、雨漏りの話ではないと思う。

美術館において地域に対して何ができるのか、宮城県が東北のゲートウェイとして東北で何ができるのかと言う視点で、ミニマムな改修、ミニマムな補修と人の力でどうやって世界一にしていくのかを議論していくことが大切だと思う。議論の順番が違うような気がする。

(高山委員)

今、世界中の災害時に宮城県がどういうことを考えたか、東北の芸術が何かできたか考えたときに、何もなかった。世界では3.11を機会にいろいろな動きが出ている。例えば宮城大学ではイギリスの大学生が来て、東北の海岸線を見て取材し、2年間かけてプロジェクトで作品を作り展示している。そういう世界的な動きを美術館も含めて吸収できていない。市民も知らないという現状がもったいない。やりかたの問題で、方向性さえ踏み出す機会があればいろいろできることはあると思う。それを支える母体としての美術館が大切。

県の中で美術館がどこに所属しているか、どんなポジションにいるのかはいろいろだが、基

本的に芸術と科学の2本の柱を軸として骨太の中で考えていく。社会の状況に対応し、全体を支えきっていく美術館として機能し、それに市民や県民が関わっていくような流れを構築していく。時に専門家も招聘し、一般の人がどう考えるか検討していくなど、大きな軸となるものが大切で、美術館が細々と生きながらえていくためにどうしようかという考え方では踏ん切りが悪い。鎌倉県立美術館の話ではないが、なくなることで危機感を持ったが、なくなることでアートを考える機会になったかもしれない。今までの歴史をどう支えるかについてなど、根本的に考えられるような問いかけをすることで、一般市民の方々の文化意識を高めるような機会になることが大切だと思う。例えば、家族で美術館にきても、父親は車で待っているような状況をどう打破していくか。バリアフリーも身体的だけではなく精神的な人もどう解放していくか。民間ではあるかもしれないが、県としてどのくらい支えていけるかということでもある。

(吉川委員)

国の施策を美術館が積極的に活用するような形になることが望ましい。

(高山委員)

私は、80年代の東北の中で一番魅力があったのは縄文だと思う。縄文をカンタベリー文化で支えられるような縄文センターを宮城県につくって、それと現代とつないでいく美術館もいいのではないかと考えた。そういう柱もあってもよいのではないか。観光地化するためにお金を使っても人は来ない。本当に人が来なくなる魅力は何かなど長い先まで考えられる発想が欲しい。特に縄文が多い東北なので、そういうものを通してカンタベリー文化をしっかりと支えていく強気が欲しい。それがないとグローバル化できない。

(中村委員)

ハード面においては、美術館を通して前川意匠の作品としての価値に触れるということはどう考えるかということが大きな課題になってくる。美術館(建物)そのものに建築的魅力があり、芸術的価値があるときに、細かい補修を繰り返して貴重に保存するのか、大きく改修してバージョンアップして良いものなのかは大きな分かれ目になる。保存するのであれば、この現状の中で機能を維持していくことになりましたが、私としては、作品としての役割は終えたので、次に大胆に改修しても良いのではないかと思います。でもまだよく分かっていないところもあります。

ソフト面においては、すべてをポンピドゥ機能とした美術館にするのは難しい。また、スタッフの作業性をもつことも難しい。例えば、アートセンターを設置する際、飾る場所ではなく創る場所を創るという発想がある。現在創るという作業は施工業者など外の人とやらなくては成らない。デスクワークで企画を作る事はできるが、内側の機能として、ソフト面として何が創れているのか。スタッフのスキルがあって、その人のビジョンやネットワークがあるとき、一人の力が10人集まったら、その10人のスキルとネットワークを集めると何が作れるのか。ソフト面としては、美術館として何を創れる場として機能しうるのか、もちろんカンディンスキーのコレクションをしっかりと研究していくということを軸としていくことは当然ですが、何

が創れるのかということをもう一度問い直すことが重要。それがないと、いくらコンセプトができて現場が動かない。いくら良いアイデアで、それをやれと言われてもなかなか難しいとなる。そこでこんな事をしたいということと現場としてやりたいことがもまれていくというプロセスが出てくる。プログラムを作成する際の現実的なビジョンをどこに求めるのか、その際ハード面とソフト面が重なり合わないとうまくいかない。ばらばらだと非常に使いにくく、バランスが悪いので、その調整をどうするのかということが各論になる。

高山先生のお話になった環太平洋のような非常に大きなシェアも大事ですが、プログラム面の中で実際にそれを誰ができるのか、きちんとコンセプトを持ち、年数をかけて、環太平洋の文化圏の人たちへの意識を持って、その人たちとのネットワークを作って、それぞれ各国の人たちと役割分担していこうとしたときに、こっちにやりたい人もいなくて、やれる人がいないとできない。ソフト面は、人のビジョンや能力と直結します。現場は横のつながりを促せたり動かせたりする人材がいないとプログラムとして機能しない。

結論を言うと、ハード面では、建築を触って良いのかということ。それがはっきりしないと改修のしようがない。プログラム面は人材の話になります。

(佐々木座長)

話し合いの根幹に関わることなので、その辺はどうなのでしょう。

(事務局：鹿野田)

前川意匠の扱いについては白紙の状態です。選択肢としては両方あります。

(小野田委員)

前川建築の中では第一線級のものとは言えない。すごくよくできている建築ではあると思うので、時代に応じてもともとある骨格をリスペクトして次につなげていくのが良い。例えばニューヨーク美術館も時代によっては手を加えてきた。書き換えて良くなってきたというイメージもあるのではないかと思う。骨格を生かして書き換えるということです。

(佐々木座長)

極論になりますが、展示場が5000㎡欲しいとなったときに、物理的に今の建物では無理なので、今の建物全体を作り替えるということも有りうるわけです。懇話会でどのような結論を導くかと言うことが主題になると思います。あとはどう受け止めていただけるかということなので、遠慮なく必要に応じては変えるところは変えるという観点でも意見を出していただきたい。

(高山委員)

ここでは駐車場の問題をどう解決するかということもあるが、現在裏の駐車場はどうなっているのだろうか。場所の余裕があれば、積極的に進めていくこともできるのではないかと思う。

(佐々木座長)

駐車場等については後日集中して話し合っていた方が良くかもしれません。

(大場委員)

転換期ということですが、戦後70年を迎えるわけです。戦後20年ぐらいで混乱期が落ち着き、戦後40年にして開館した宮城県美術館でしたが、戦後70年目にして節目節目の中で、いろんな事が出てきて、今大きな転換期に来ている。私もこの美術館に勤務したことを考えると、なかなか人ごとにはできないものです。

大きな視点でものを考えることは非常に大切です。開館当初は、地域に愛され、地域社会の中の宮城県美術館として存在していたが、今どこかで自信をなくしてきている気がする。地域文化のために宮城県美術館が何ができるのか。3.11後の地域復興において、文化芸術の力が欠かせない事の重要性は確認できているが、その中で地域文化の拠点として生まれ変わるといふか、リニューアルしなくては成らない。それは大きな事だと思う。地域コミュニティに積極的に関わって、地域の人々と文化を育むために、いろんなことでこの機会を生かさなくてはならない。宮城県美術館の持つ潜在的な能力を生かすために必要なことは何か真剣に考える必要がある。

ミュージアムという点で考えると、博物館や資料館など同じような問題を抱えている施設同士で話し合うことで美術館なりに問題となることや解決法が見えてくるのではないかとも思う。もっと関連したところとの話し合いも必要になると思う。今後、マネジメントやアーカイブ、リテラシーなどの話し合いも深まっていくと良い議論になると思う。

(竹内委員)

素人ですが、皆さんのお話はとてもよく理解できました。

県立の美術館は雰囲気はどこも似ていて、行くとだいたい同じような感じを受ける。新しいか少し古いか、少し明るいとかこの美術館のように重厚とかのどっちかの感じです。私は絵を見るためには東京の美術館に行く事が多いです。ほっとするために宮城県美術館に来ます。ここに来ると、気持ちがゆったりとします。リニューアルも大切ですが、歴史も考えて欲しいです。スクラップアンドビルド的な考え方ではなく、大事に自分で創ったものを大切に使うという考え方が好きです。もちろん東京には魅力的な美術館がたくさんあります。こういうことやああいうこともやっていると感じます。それは刺激的で楽しいですが、でも、宮城県美術館に来て、ちょっと落ち着いた静かなところに座るとああいいなあと思うことがあります。

(中村委員)

ほっとしたいために美術館に行くことはとても大切なことだと思います。

(竹内委員)

以前、東京のフェルメール展に行くと、その混雑にびっくりしました。後ろからしか見れない。宮城県美術館ではすぐ目の前で見る事ができたんです。素晴らしいことです。時には、

人が多い中で見ることの方がありがたいような気がしていました。でもそれは錯覚で、ゆっくりと好きな絵を見ることができる宮城県美術館の方が良いなあと思います。

家が近いので、ちょっと見に行こうかなと言うときにすぐに来れることが良いです。

(佐々木座長)

県政100年を機に、70年代から80年代に全国で多くの県立美術館が誕生し、この30数年から40年間に建てられた多くの県立美術館が同じような基本方針なんですね。そしてリニューアルの節目を迎えています。これまでの基本方針を受け継ぐのか。現状にあった形に変えてステップアップしていくのか、おそらく全国の県立美術館に注目されています。なるべく注目され、かつ見本となるような基本方針みたいなものをこの懇話会で作っていければ良いなあと思います。いま基本方針について質問並びに御意見をいただきました。非常に貴重な御意見だったと思います。

例えば「国際的」という言葉が使われてはいるが、果たして実態はどうか、「総合芸術センター」という言葉もそうですね。発足当初は当然そういう意識があったが、現状とこれから、その言葉がどんな意味を持つのかをしっかりと踏まえていかなければいけないし、場合によってはその言葉そのものが切り替わっていく必要もあるわけです。また、30数年間に蓄積された潜在的に宮城県美術館が持っているかけがえのない力があって、その一方でどうしても達成できなかった目標が有り、さらに新たな目標意識も生まれてきている、それをどのように考えるかというときに、基本方針が極めて重要な部分であるということはみなさんの一致しているところかと思えます。しかし、ここで、細かい文言を検討していくのではなく、いまの皆さんの意見を元にもう一度文言づくりについて練り直していく事が必要だと思います。また、部分と大きく関連することもありますので、特に具体的な活動や施設の内容とリンクしている部分が非常に多いので、基本方針については、この後も何度もでてくるので、その都度フィードバックさせながら盛り込んでいくなど検討を重ねていくということではいかがでしょうか。

(高山委員)

その前に、美術館だけで処理するというのではなく、博物館もあるわけで、環境の違いはあるが博物館と連携するとか、仙台市等との連携をどうするのか、メディアテークとの連携なども考えてはどうかと思う。すべてを美術館が解決するというのではないと思う。今後の課題として、どこかに残して置いて欲しい。

(中村委員)

私も仙台メディアテークとは距離感が近い感じがする。仙台メディアテークの存在ができてから、コンタクトポイントとして、仙台・東北圏へのアクセスが良いので東北の入口になっている。美術館は入口としては見えないところがある。メディアテークとは近いので、アクティブな部分はメディアテークで活発にし、美術館は静寂でほっとするか安心する空間にするとか、そういう良さを含めた機能面を考え、街の中でどう美術館が機能するのか、それぞれポイントにある施設と連携しながら考えることで、全部自分たちでやらなくてもよくなる。市民は

選んでいくので、中間部分は機能拡張するために民間力を取り入れたりすることもできる。これからは、新しい人材が入ってこないとなかなか難しくなる。ハード面のリノベーションとともに人のリノベーションも必要。ソフト面とハード面を街のポイントポイントごとに考えていくという点は賛成ですね。

(吉川委員)

ミュージアムアライアンスについて、なぜ脱退したのか。

(美術館：有川館長)

以前は加入していたが、今は加入していない。方針の見直しがあった際、前提となったのがまずミニマムな負担にすることだった。そのための規約を改正するにあたり、今までの事業がミニマムだったのか、あるいはそれぞれのミュージアムが独自の事業を進めるときの補完をするものなのか、継続するために事業が立ち上がっているのか検証が必要なので、検証して欲しいと話を出した。検証されなかったと私は理解している。

もう一つは、年間の事業計画が明確に示されていなかった。この点ではミュージアムアライアンスの方との見解が異なるかもしれないが、それから、国からの助成金の使途と事業計画が整合していない。また、決算の段階での使い方が明確ではない。従って補助金の使い方に対して我々が決裁を承認する場合、その使い方に対して責任を持って良とできないということを伝えました。

なおかつ、ミュージアムアライアンスを否定はしませんし、そこで行われることと美術館がリンクして事業を行えば良いのであって、美術館がそのピースになる必要はないわけです。ミュージアムアライアンスと美術館はイコールパートナーでいろいろな事業に対してはオープンなので、これを否定するものではないので、むしろ良い形でコラボレートできればと思います。

(佐々木座長)

議論はつきないのですが、展示についても話し合いをしたいと思いますので、今後基本方針に触れることもあると思いますので、そこで御意見をお願いいたします。次に施設の展示についてです。

協議の口の美術作品等の展示について事務局より説明をお願いします。

(美術館：米倉副館長)

資料4について説明。

(佐々木座長)

収蔵スペースについても議論の中に含まれていると考えているよいですね。

では、展示と収蔵の両方について議論を進めていきます。この中で、セキュリティと漏水、調光設備等については美術館として当然必要なことですのでやっていただくという前提で話

し合いを進めていきたいと思います。

まず最初に、何か御質問等はございますか。

(高山委員)

ホワイトキューブではないので、くすんでいる部分とかなんとかならないのか。照明、天井、壁、床についてもどういう選択がいいかというよりも何とかしなくてはならないと思います。くすんだ感じが良いという人もいるが、くすみすぎではないかと思う。

また、建物の特色だと思うが、要塞型なので通路もなく、外との関係がなく開放感がない。もっと開放型というか中も外も拡げて、開放するようにしたほうがよい。何か方法を考えた方がよい。周りから美術館が見えにくいので、何か周りから見える工夫や方法が必要。

(佐々木座長)

「ホワイトキューブの説明。」色がついているとどうしても染まってしまうことがあるということ。これは企画展示室の話ですね。

(高山委員)

以前県民ギャラリーの壁をボランティアでペンキで塗り替えたことがある。

(中村委員)

質問ですが、常設展示や企画室の壁の塗り替えはどのくらいの頻度でやっているのですか。

(高山委員)

塗り替えではなく、張り替えなので、開館当時のままに近い。日に焼けたり、破れたところを部分張り替えしたりしているだけ。企画展示等で必要な場合は、業者が入って仮設壁を建てて対応する。一昔前のスペック。

(中村委員)

私は企画展の度に塗り替えます。スタッフがいたので、自分たちでペンキを塗りますし、壁とかに木ねじで穴をあけても穴を塞いでいます。また、壁と仮設壁の間に空間を創ります。人が入れるようにしたり、デッキなどのものを置いたりできる様にしています。なので、たえずフレッシュな企画ができる。だから、作家には穴を開けても塗り替えても自由にどうぞと話します。何をやっても良いですよと言うのが施設を運営する側のプライドですよ。

美術館はタフな部分がないといけない。大事なのは作家がわくわくするような美術館で、それが第一印象にないとやる気がなくなってしまう。施設壁の塗り替えは飾る作品を生かします。

(美術館：有川館長)

開館後9年目にクロスを全部張り替えた。それ以後はやっていない。塗り替えはできない特注の素材で数千万円かかった。資料の6Pの9番目にあるように、施設の老朽化とともに旧態

化への対応も必要。当時は特注の良いクロスを使っていたので、塗り替えはできないのですが、今は展示ごとに塗り替えるというのが主流です。美術館としては、塗り替えができる様なシステムに変えていきたい。今日化するという事です。

ルーバーもそうです。当時ははやったのですが、何をどう展示するのかやってみなくては分からない状況だったので、蛍光灯が目立たないようにルーバーにすることにしました。しかし実際は、ルーバーが非常に蛍光灯を際立たせることになってしまった。そういった意味では、老朽化のテーマへの対応だけではなくて、その考え方も変えても良いのだというスタンスに私たちもたっていかななくてははいけない。その辺も議論して案として示していただければと思います。

そのことは我々の願いだけではなく、財政的な問題もありますので、客観的な知見として示してもらえると良いのではないかと思います。

(中村委員)

展示の際、クロスの場合、ビスを打たなければならないが。

(有川館長)

クロスにビスは打たないで欲しいという当時の意向だったので、ワイヤーでつり上げている。なので、作品を展示する時に、ワイヤーが意匠として出てくる。

(佐々木座長)

1. 5時代ぐらい前のシステムで進めている。いわき市美術館もそうですが、多くの所がそのように変わってきているので参考にして欲しい。また、この会議でも話題として出てきたということも頭に置いて欲しいと思います。

(高山委員)

壁についても、人が入れるくらいの空間を作る事が今は一般的になっている。

(中村委員)

作り手側の多様性に対してどれだけ合わせられるか。どのくらいの度量の広さで展示空間を作れるかが美術館の魅力だと思う。あれはだめこれもだめでは、心の壁をつくるだけなので、全国の美術館の抱えている問題に応えるような一時代先の展示室をつくることで、さすが宮城県と言われるようだといいのではないか。アイデアを出すといろんな人も意見を言ってくれらると思う。

移動壁もやっているが、つなぎがきれいではなかったり、しまっておく空間も必要になるので施行経費を浮かせるための手法として活用するにしても、課題との板挟みが出てくる。

提案ですが、美術館職員の中にインストーションスタッフとしての専門家を入れる。作品を触るプロフェッショナルなので、専門的な知識が必要になるが。現代美術も含め、多様なハード面、ソフト面を内部で解決できる。

(高山委員)

欧米でいうと、ウォールディレクター、フロアディレクター、ライティングディレクターと呼ばれる人達で、作家の要望に応じて、展示の仕方をサポートしてくれる。そのぐらいあちらでは作品を見せるということに責任を持つが、日本では学芸員がかけずり回っているので、追いつかない感じがする。

(吉川委員)

展示面積が狭い。入るとあそこで終わりと言う事が分かってしまう。他の美術館では、この先どれくらいあるのかなという空間との出会いの楽しみがあるけれども、知っているのが分かってしまうのがさびしい。また、大きな作品にあってないので、ぎゅうぎゅうになってしまう。

(佐々木座長)

今の展示室はどちらかというとリニア的展示向きで、入口から若いときから晩年まで順を追って展示していくものにはふさわしいが、今後はモザイク的な展示への対応も求められている。それが新しい課題。30年前は、回顧展的なオーソドックスなやり方を意識して展示室を作ってきたが、今は併行展示と呼ばれる等価値的な展示も出てきて、リニア的展示が正しいとは限らなくなってきているので、当然ハードの在り方も変わってくる。せつかく大きく変えるというのであれば、そこもぜひ反映させていきたい。

(高山委員)

ピンうちができない床なので、やれるようにした方がよいよね。

(中村委員)

全てができなくても、ピン打ちしても良い空間があっても良いという事ですね。

それをするとき、外部業者を入れなくてはならないというのであれば経費がかかるので、先程の話のように、インスタレーションスタッフを一人でも入れておくことで、作品のメンテナンスや作品展示の技術面を企画側と一緒に考えていくことができ、能率が上がったり、いろんな問題が内部で解決できる。また、そのスタッフの下に地元の作家が入ったりすると、作品に触れたりすることで自分の技術を高めたり勉強にもなり、教育的効果も高い。なのでインスタレーションスタッフをハード面とソフト面をつなぐという意味でもぜひ入れてはどうか。

(高山委員)

あと気になっているのは、送風の仕方。現在の換気システムも変えていくようなことを考えなくてはいけない。

(中村委員)

宮城県の理想のホワイトキューブを考えればいいわけで、理想のホワイトキューブはどうあ

るべきかという議論になると思います。

(佐々木座長)

広さについてはどうですか。現在1100㎡ぐらいかと思いますが。たぶん全国に比べると1割から2割ぐらい狭いと思いますが。

(中村委員)

搬入搬出の問題もありそうですが。

(竹内委員)

30年前なので、歴史がここまできているのに、基本的なものを何も変えてなければ時代遅れになってきている。

(佐々木座長)

2月の針生一郎展の展示の仕方は意図的ですか。十分見応えがあったが、普通に鑑賞しようとする1、5倍くらい広い展示場が必要と感じた。すると今の展示場ではどうなのか、全国の県立美術館などのさまざまな大型展示を仙台が東北で唯一巡回で受けるという時に、1500㎡で設定されている展覧会を1100㎡で受けるということはかなり難しいのではないかと思います。それはいかがでしょうか。

(高山委員)

ただ、そういった場合、今の状況で壁を外すとか何とかして、物理的に拓げることが可能なのか。

(小野田委員)

今、上位の話と下位の話がかなりごちゃごちゃに話されているような気がします。まだ2回目なのでそれで良いのかもかもしれませんが。

このスケジュールでは、いったいいつどこで何を話し合うのか、どこに向かっているのかがよく分からない気がします。おそらく議論の中で、みなさんは読みが良いので、徐々に集約させていかれると思うので、大きく外れはしないと思います。しかし、今後大きな話をいれていくとすると、2年間使って最後に精緻な計画を作るといっていますが、むしろ最初にざくっとフレームを作って、例えば職員を研修に行かせるとか、マネジメントさせるとか、試設計してみるとか、そうやってワークショップをやりながら市民の意見を聴きながら、アートを盛り上げて、活動と研修に2年目をあててみるというものいいのかなと思います。

(高山委員)

市民に自分たちの美術館というコンペを開いて、みんなで展示をやって意見を言い合って、専門家と組み合わせちゃんとしていくというプロセスにもっていくのも良い。

(小野田委員)

そのためには、2年間で丸々使うというのではなくて、最初の1年にベンチマークのステディをある程度して、プランの現状を理解し、予算案の枠組みを作って、その中でここ10年の話から、20年後をめざして考えていくという大きな話を考えていく方が分かりやすいと思いますが。

(吉川委員)

〇〇から入ると、機能が入れられなくなってしまうので、初めに地域の美術館としてどういうコンセプトなのか。地域の人はどう動けるのか、アーティストがどう動けるのか、アートが動くことに対して宮城県全体がどう応えるのかを考えていく方が良い。

(小野田委員)

また、メディアテークが何を受け持って、宮城県美術館が何を受け持って、足りないものは何なのかという話や人的資源、地理的資源、金銭的資源などの基礎資源の確認などもしていく。

(高山委員)

地下鉄ができて行きやすくなったと言う話を聞くよね。

(中村委員)

今話したことを2年間もやるんですか。

(吉川委員)

なので、順番を変えた方が良い。

(鹿野田総括)

ここにある基本構想は、あるべき姿を御議論いただくところまでが基本構想ということにして、実際それをもとに展示室を具体的にどのくらいにするとか、どこをどのように改修するかというのは、次年度に基本計画の中で盛り込んでいくことになるので我々は認識しているので、この懇話会では、このようにあるべきなのだという所までについて話し合っただき、まとめる段階までをお願いしたい。

(小野田委員)

2年間使って良いと言うことは分かったのですが、我々は、あるべき論を進めながら、実務もやっている者として、最近の実務のやり方も変わってきていて、以前は今回のように基本方針があって、それに基づいて順序立てて進めていたが、今はお金もないし、同時に競争も激しくなっているので、早めに問題(リソース)を確認して、今何をやっていくのかというコンセプトを明解にして、試作品を創っていくらかかって、どうインパクトがあったかなど市場調査して良いものを選んでいく流れになっている。そのワークショップの中でベストの案を選んだ

り、そこでひっかかった人材を運営者の卵として取り込んでプロジェクトを練り上げていく。宮城県が今までやってきたやり方とはなじまないかもしれないが、本気でやろうとするならば2年間という時間の資源はあるので、前段と後半と分けて、後半はシュミレーションをやって、その分、結論を前半に出してしまうというやりかたはどうでしょうか。御検討いただきたい。

(吉川委員)

創作室には、東北大学工学部の大学院の工学デザインの人達が入り出して試作品を作っていたりする。そういう多様な人材が入り出して、美術館に集まっているのに、それを生かしていないと思う。好きでゆっくり考えられるからだと思うけど、集まっているのに顕在化されていない。それに対してインスタレーションスタッフがいたら何か生まれるかもしれない。アーティストやコレクションに対してどうするかということも大切だが、むしろ今生きている人をどう結びつけていくかということも必要。

(高山委員)

創作室+物作りのように合体したような新しい形に変えていかないと若い人はついていけない。

(小野田委員)

話し合いのやり方を変えた方が良い。メディアテークの企画メンバーの一人でしたが、お金がなく、最後は人だと分かったので、事前にワークショップに取り組んで、人を引っ張ってきて働いてもらった。お金がない中でパフォーマンスを高めていくという形の方が良いと思う。

お金もないし人もいないし、案を出して県に提出しても、県の財政からお金ないからできないということになってしまう。限られたお金の中でどう動くか民間からもひっぱってきてコラボレーションして、2年目に事業化するために、1年目に作戦と大きな方針を考えてしまう。このやり方で東北大の講堂をコンサートホールにリノベーションした時は、企画を作ってシュミレーションをたくさんやってきた。そこでは、あまり経費をかけないで進められた。それとは今回のことは少し異なり、アートは重い話ではありますがそういうやりかたもあります。

(佐々木座長)

話し合いの手順については、疑いなく受け止めていましたが、改めて意見が出たと言うことで、事務局で協議していただけますか。

(事務局：鹿野田)

御意見をいただきながら、調整させていただきます。

(大場委員)

提言みたいな話をしていてもどこまでいくのか。どれだけの枠の予算があるのかという不安がある。そんな話は無理だよと思って聞くのか、そこまではできると思っているのか。大きな

話をして良いのか、自分で判断する範囲がどれくらいの予算なのかということが特にハード面では気になる。

話を進めるときにそのことを常に意識していなくてはならないという気がしている。

(小野田委員)

おそらくこの会議は、担当課としてはお金を取るためのもので、このままではお金が取れないから、ここで話し合っただけでもこのぐらいお金が必要ですよと結論を出していく。ただ今議論したことがどのくらいかかって（ベンチマーケティング）、どのくらいの人が必要になるのか。他の施設ではどうなのかということをし少し勉強していきながら確かめていかなくてはいけない。そしてこのプロジェクトはどこに行くのかということ具体的に議論しなくてはいけない。もちろん大きな話も必要になるが。だんだんそこに落とし込んでいく作業が出てくる。でないと絵に描いた餅になってしまう。今後、展示メーカーが基本計画を受けるのか、建築事務所が受けるのか分かりませんが、普通に見積もりをするわけではないので、せつかくのいろんな人のノウハウが生きなくなってしまう。

(中村委員)

2年間ではいろいろなことができる。現在、予算はなくてもビジョンだけで動こうとしている。東京文化資源会議を立ち上げている。東京の街では、いろんなことがばらばらになっている。NPOやイベントもばらばらなので、行政が文化条例を作っている時間を待ってられない。施設も文化条例のようなスピードでは間に合わない。

今回も、文化支援会議のようなものでもいいが、この会議と同時に仙台の民間や企業を巻き込んで、別なステージでリニューアル後の美術館の応援団となるような人達を、この2年間、一緒に走らせた方がよい。

若い世代は待っていると思うので、その20歳ぐらいの人たちの気持ちがどこに行くのか感じないと現実的にはリニューアルはしにくい。何か伏線を張るようなことを同時進めて、オープンしたときにみんなが待ってましたと期待値をもって来るようなリニューアルの仕掛け方、美術館側からだけではなくて、市民側からも同時に考えるような伏線を大企業も交えて張っていくことが大切だと思う。

(吉川委員)

八戸市や弘前市ではみんなが行きたくくなるような美術館を創ろうとしているのに負けたくないし、今後共同したい。仙台市には美術館がないので、この宮城県美術館が気を張って、がんばらなくてはならない。

(中村委員)

近年、芸大の受検者が30年前と比べて1/3になった。東北からはほとんど受けてこない。特に宮城県は。近場で済まそうとしている。それは美術館の役割も大きいと思う。これからリニューアルをするのであれば、文化力を上げていく議論が必要。仙台はこれだけのインフラを

持っているので、圧倒的に強いと思う。今回の話はとても可能性がある話である。2年間あるのであればゆっくりでもよかった。

(佐々木座長)

まだまだ意見がつきないようですが、進め方について改善の余地があるので事務局で検討していただきたい。時間が来たので、本日はここまでとしますが、作品の展示については十分な議論がされなかったので、改めて仕切り直しで次回の協議事項としたいと思います。

以上で議事を終了いたします。事務局にお返しします。

(事務局：鹿野田)

議事お疲れ様でした。続いて連絡に入ります。まず次回の連絡に入ります。

(事務局：小野寺)

資料5を御覧ください。委員の皆様から提出いただいた出席可能日をもとに調整したものでございます。第3回以降につきましては、丸印のついた期日に開催したいと考えております。今回は10月6日(火)を予定しております。会場については、まだ未定ですので、改めて後日連絡させていただきます。お手元に会議録がございますので、何か加除修正がございましたらFAXまたは電話で事務局に御連絡願います。その後、公開させていただきます。

(中村委員・小野田委員・高山委員)

10月6日は都合が悪い。

(事務局：小野寺)

では、白紙に戻させていただいて、再度日程調整をさせていただき、提案いたします。

10月が第2週だけになってしまいますが、2年ということもありますので、後半にずらすこともできます

選択肢を拡げて再度調整いたします。

(事務局：鹿野田)

以上をもちまして、第2回宮城県美術館リニューアル基本構想策定に係る懇話会を閉会いたします。ありがとうございました。